

知求会ニュース

2009年9月

第31号

◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科公開授業の案内

平成 21 年度国際学研究科では、ひろく一般社会人を対象に、「日本人の知らない日本像—外国から見た日本—」を公開授業として、以下の内容で宇都宮大学国際学部 E 棟 5階 イメージラボ I にて開催されます。募集人員は 45 人、受講料は無料です。申し込み方法は、「公開授業参加希望」と明記し、住所・氏名・連絡先電話番号をご記入の上、「往復はがき」または「電子メール」にて、お申込み下さい。申込み先は、〒321-8505 宇都宮市峰町 350 宇都宮大学国際学部総務係 または Email: koksomu@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp です。

公開授業科目 **国際学総合研究 B「日本人の知らない日本像—外国から見た日本—」**

第 1 回 10 月 03 日(土) 午後 2 時から 4 時 **中村 真**教授

「外国人が見た日本人の笑い」

第 2 回 10 月 10 日(土) 午後 2 時から 4 時 **バーバラ・モリソン**講師

「日本文化の代表像：武士道、その他」

第 3 回 10 月 17 日(土) 午後 2 時から 4 時 **石浜昌宏**教授

「ドイツ映画に見る日本」

第 4 回 10 月 24 日(土) 午後 2 時から 4 時 **スエヨシ・アナ**講師

「ラテンアメリカ、ペルーにおける日本人移民を通じた日本のイメージ形成」

第 5 回 10 月 31 日(土) 午後 2 時から 4 時 **マリー・ケオマノータム**准教授

「町内会の比較社会学」

第 6 回 11 月 07 日(土) 午後 2 時から 4 時 **松金公正**准教授

「台湾における<日本>認識—日本語族と哈日族(ハージーズ)」

◎ 掲載記事紹介

1. 読売新聞 平成 21 年 4 月 2 日(木)に、「宇大と本紙が公開講座 全 10 回 本県の技術・研究紹介」と題して、**重田康博**先生の講師紹介が掲載されました。
2. 読売新聞 平成 21 年 4 月 16 日(木)に、とちぎ寸言コーナーで「社会で生かす雇用の安全網」と題して、**中村祐司**先生原稿が掲載されました。
3. 宇都宮大学新聞 平成 21 年 4 月 27 日(月)に、「教員から新入生へ」の寄稿として、「人々との関わりを大切に」と題して、**アンドリュー・ライマン**先生原稿が掲載されました。
4. 朝日新聞 平成 21 年 5 月 8 日(金)に、「環境力」に強みと弱み」と題した記事の中で、「栃木の潜在力 全国でも強い」と題して**高橋若菜**先生原稿が掲載されました。
5. 朝日新聞 平成 21 年 7 月 17 日(金)に、「留学生「母国知って」」と題して、**呂 素素**さんが実行委員長して開催する国際交流フォーラムの紹介記事が掲載されました。

6. 宇都宮大学「UU now」 第 18 号 平成 21 年 7 月 20 日(月)の 2 面に、「環境 ISO 学生委員会 学生主体で環境への取り組みを改善」と題して、**和気徹也**さんが委員長として活動している紹介記事が掲載されました。

◎ 新刊案内

Jie Qi (戚 傑), 「War and Beyond: Twentieth Century Curriculum Reform and the Making of a Follower, a Citizen, and a Worker」 Bernadette Baker 編『New Curriculum History』, 2009 年 3 月, 米国 Sense Publishers, 273-293 頁

◎ 平成 21 年度 第 1 回 各学部等同窓会連絡協議会報告

平成 21 年 7 月 11 日(土)午後 1 時半から、大学本部棟 3 階第 2 会議室にて、平成 21 年度 第 1 回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・馬場敬信 理事・渡邊直樹 理事・石田朋靖 理事・國友孝信 理事の大学側 5 名と事務局担当者 4 名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 事務局局長・清水由行工学部副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・田中秀幸 同理事長の同窓会側 8 名でした。議事内容は、検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 国際学部だより

1. 国際学部同窓会第 5 回定時総会・懇親会開催案内

来る 9 月 5 日(土)午後 2 時半から宇都宮大学・大学会館 2 階トークルームⅡにて、国際学部同窓会の第 5 回定時総会が開催されます。懇親会は午後 5 時から上河原交差点そば「海蔵」にて、会費 3,500 円で行います。会場の HP : <http://www.umizou.jp/index2.html>

2. 国際キャリア合宿セミナー2009 開催案内

2004 年から開催されている国際キャリア合宿セミナーが、栃木県青年会館(コンセーレ)を会場として 9 月 19 日(土)から 21 日(月)の二泊三日で開催されます。今年のテーマは、「国際舞台で活躍を目指す若者たちへ」です。講師は、国際公務・**小阪順一郎**氏(国連難民高等弁務官 駐日事務所)、国際協力 NGO・**佐伯美苗**氏(日本国際ボランティアセンター職員)、青年海外協力隊・**結城史隆**氏(白鷗大学教育学部 教授)、第三世界ビジネス・**佐々木敏行**氏(株式会社 FAR EAST 代表取締役)、国際保険医療・**石井博之**氏(国際医療福祉大学 講師)、国際貢献企業・**金田晃一**氏(武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部)、食と農と環境の国際協力・**澤登早苗**氏(恵泉女学園大学大学院 准教授)、留学・進学・インターンシップ・**新海美保**氏(株式会社国際開発ジャーナル社『国際協力ガイド』編集長)の諸氏です。

3. 掲載記事紹介

毎日新聞（平成 21 年 2 月 14 日(土)発行)に、「中東紀行集を自費出版」で国際学部 4 年の **和気徹也**さんの記事が掲載されました。

下野新聞（平成 21 年 2 月 23 日(月)発行)の 3 面に、「ごみ減 ひと肌脱ぎます」と題した記事の中で、国際学部 3 年の **林 奈瑞那(なずな)**さんのコメントが掲載されました。

下野新聞（平成 21 年 3 月 18 日(水)発行)の 1 面に、「宇大に「新顔、」で国際学部卒業生の下野新聞社記者・**岡田優子**さんの取材記事が掲載されました。

読売新聞（平成 21 年 4 月 4 日(土)発行)のキャンパスコーナーで、「弁当容器リサイクル拡大へ」と題した記事の中で、国際学部 4 年の **林 奈瑞那(なずな)**さんのコメントが掲載されました。

下野新聞（平成 21 年 4 月 22 日(水)発行)の 31 面で、「学生・主婦の起業支援」と題した記事の中で、国際学部 4 年の **村田直哉**さんのコメントが掲載されました。

宇都宮大学「UU now」第 18 号（平成 21 年 7 月 20 日(月)発行)の 3 面に、「KAKEHASEEDS NGO と連携し海外協力」と題して、**佐藤杏子**さんが代表して活動する紹介記事が掲載されました。

宇都宮大学「UU now」第 18 号（平成 21 年 7 月 20 日(月)発行)の 3 面に、「ナムチャイ 自ら翻訳した絵本をタイに届ける」と題して、**佐々木まりや**さんがタイ訪問の責任者として活動する紹介記事が掲載されました。

研究室訪問 23 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 23 回には、地球社会形成研究講座の **清水奈名子**先生にお願いしました。

「国際機構論研究を志して」

清水 奈名子

「国際機構論」と平和

私の専門分野は、国際連合や欧州連合(EU)などの国際機構をその研究対象とする「国際機構論」です。国際関係を包括的に捉える学問が確立したのは 20 世紀に入ってからのことですが、そのなかでも国際機構論は、実際に国際機構の機能や種類が増えていった 20 世紀後半以降に、ようやく研究が本格的に始まりました。この分野の「古典」と言われるイニス・クロード・ジュニア(Inis Claude, Jr.)の記した著書『剣を鋤に』(*Swords Into Plowshares: The Problems and Progress of International Organization*, Random House, 1971) が刊行されたのが 1971 年であったことから明らかなように、まだ非常に若い学問分野です。

この分野の研究を志した理由はいくつもあるのですが、それが戦争と平和の問題を扱う分野であったことが最も大きな要因でした。上述した『剣を鋤に』という書名は、旧約聖書の「イザヤ書」のなかにある一節に由来しますが、そこでは神が戦争のための武器である「剣」を、農耕のための道具である「鋤」に打ち直すことで、国家間の争いがなくなる

ことが預言されています。ニューヨークにある国連本部には、この聖句を表したモニュメントが建てられていることを御存知の方も多いと思います。この句に示されているように、国際機構論の中心的な問題関心は常に、いかに戦争を乗り越えて平和な世界を実現するのかにあります。

こうした目的論的な学問傾向は、聞く人によっては理想主義的に聞こえるかもしれませんが、しかしそれは単なる「べき論」に終始するのではなく、実際に多くの犠牲者を出してきた幾多の戦争経験が出発点になっています。普遍的な国際機構である国際連盟と国際連合に注目してみても、それらはいずれも世界大戦の反省を受けて作られましたし、地域的な国際機構の代表的な存在となっている EU も、その源には戦争に明け暮れてきた欧州に不戦共同体を設立するという目的がありました。多大な労力と費用をかけて国際機構が人類の歴史に登場した背景には、常に戦争という問題があり、時代が下るにつれて犠牲が飛躍的に増えたからこそ、各国家は主権的な自由の一部を国際機構に委ねるという自己制限を受け入れてまでも、その営みに参加したのでした。

学部時代にみた戦争の傷跡

それでは、そもそもなぜ戦争と平和の問題に興味をもつようになったかといえば、学部時代に参加したナチス・ドイツによる戦争の痕跡を学ぶフィールド・トリップが強く影響していると思います。ドイツ、フランス、ポーランドの 3 カ国をめぐるながら、アウシュヴィッツ強制収容所などを見て回った経験は、人間が戦争という状況に置かれたときに何をなすのかという、人間の弱さと残酷さをつぶさにみつめることになりました。

この旅行では、ガス室の壁に残る犠牲者の爪痕、殺された子どもたちの靴の山、ユダヤ人の絶滅計画を策定したヴァンゼー会議跡など、加害の歴史を学ぶと同時に、アウシュヴィッツにおいて他の収容者の身代わりとなって餓死刑を受け入れたコルベ神父や、レジスタンスに身を投じた若者たちの記録など、絶望的な時代にあってもその流れにのみ込まれずに行動した人々の記録にも触れることになりました。人間的に生きることが困難な時代にあっても、攻撃と破壊ではなく和解と共生を選びとろうとした人々を支えたものは何であったのか、他方で多数の人々が加害者として戦争行為に加担してしまうのはなぜなのか、欧州だけでなく日本とアジアの関係も含めて、考えるようになりました。

このような問題意識を抱くようになった時期に出合ったのが、「国際機構論」という学部の授業でした。教鞭をとられていたのは最上敏樹先生という、この学問分野を日本の学会において主導しておられる方でしたが、国際法の研究者でもあることから、その授業も「国際社会における法の支配は可能か」という観点から国際機構が分析されていました。戦争を繰り返しがちな主権的国家体系を乗り越えるべく生み出された国際機構は、国際社会における「力の支配」という現実を「法の支配」によってどこまで乗り越えることができるのか、意欲的な研究意識をそのまま伝えてくださる授業が、この分野を具体的に志すきっかけとなりました。その魅力は最上先生の御高著『国際機構論』（東京大学出版会、初版 1996 年、第 2 版 2006 年）に、余すところなく示されています。

大学院時代と今日の研究課題

大学院では修士、博士課程ともに最上先生の指導を受けることになりましたが、より専門的な研究を行うための厳しい修行の日々となりました。国際学研究科同様、少人数制の大学院でしたので、授業やゼミで課題となっているリーディングを毎週読みこなし、しょっちゅう回ってくる発表準備のために、土日も休みなく勉強を続ける日々でした。授業のなかでも大学院に入れば当然のことながら、思いつきやいいかげんな議論は一切許されず、「その概念の使い方は精密さに欠けるのではないか」「そんなに多くの語を用いて説明せずに概念化して端的かつ明確に話すように」「いまの発言は質問として意味をなしていない」などなど、多くの先生方からみっちり鍛えられたことが思い出されます。

この時代に、毎週何十冊も関連する専門書を調べ、国連機関などの一次資料を分析する作業を繰り返したことは、今日の研究のための基礎力を養うことにつながったと思います。また、学年横断的に近い関心をもっている学生同士で、国際判例研究会、仏語文献読書会、自主ゼミなどをしばしば企画しました。学問的作業は基本的に孤独な作業なのですが、複数の人々と学び合い、議論し合う場をもつことで、自らの研究を客観視し、見つめ直す貴重な経験となりましたし、知的営みの心躍るような楽しさを分かち合う機会にもなりました。

現在の研究課題としている、冷戦後の国連の安全保障体制の質的な変化に興味をもつようになったのも、この大学院時代です。国家間の戦争をどう乗り越えるかを至上命題として生まれた国際機構が、今日ではただ国家間戦争に対処するだけでなく、一人ひとりの人間の安全や福祉に注目して、その安全保障機能を発展させつつあります。戦争と平和の問題を考えながら、個別的な問題分野に取り組み続けたいというのが現在の研究目標です。

(2009年8月20日原稿受理)

博士録 07 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第7回目には昨秋学位授与された藤田研究室OGの平井雅世さんをお願いしました。

「博士論文の執筆を終えて」

平井 雅世

2004年に国際学研究科を修了させていただきました平井です。修了後、東京農工大学大学院連合農学研究科に進学し、4年半の歳月を要して、昨年(2008年)9月に博士号を授与していただきました。

私は一介の主婦であり一児の母親ですので、6年間の研究生生活を送ることは、私の人生設計にはありませんでした。

ですから、学位を取得させて頂けたのは、自分の足りない能力を回りの方々や家族によって支えてもらい、何よりも国際学研究科時代の恩師藤田先生と東京農工大学連合農学研究科時代にお世話になった恩師、宇都宮大学農学部茅野先生のご指導によるものと、ただただ感謝の心で一杯です。

そのような私が研究生生活に転身することとなったきっかけは、日本の NGO が、旧郵政省ボランティア貯金の助成金による国際支援を、トップダウン式で行うものの、その殆どが村民に受け容れられずに継続しなかった様子を目の当たりにしたことから、その功罪を明らかにできればという理由からでした。しかし一方では、支援対象地であるラオス、ミャンマー、タイの国境付近の山間傾斜地という場所と、そこに居住する山地少数民族「モン族」への興味も加わっていました。

修士論文作成や支援事業のために年に 3~4 回の渡タイを繰り返し、調査を続けるうちに、「モン」という民族と彼らの生存戦略について一層関心を持つようになり、修士論文を書き終わる頃には、隣家の家計がどうなっているのか、ちょっと覗き見したいような感覚から博士課程に進むこととなりました。

タイ国北部山間地域には多くの山地少数民族が居住していますが、グローバル社会の影響に国の政策も加わり、彼らを取り巻く環境は社会的にも経済的にも大きく変容し、生存への模索をしているのが現状です。博士課程では、『タイ北部傾斜地における村落共同体の発展と経済変容』を研究のテーマとし、その大変な状況を熱帯傾斜地農業特有の課題となっている土地生産性と経済的な観点から浮き彫りにすることを試みました。

この研究成果を一般の市民の方々にお伝えすることが重要であると考え、本年度の宇都宮大学生涯学習センターの公開講座において、『熱帯傾斜地における持続的な農業を展望するー環境の持続性と生態系サービスを考えるー』というタイトルで講義を行わせていただきました。

同時に、後継者不足に悩む日本の里山に生かせればと、那須烏山大木須において米作りを行うための公開講座「大木須の里山で米作り」を行っています。

また、NPO 法人エコビリティのプロジェクトマネージャーとして、タイ北部山間地域において奨学金給付活動を行いつつ、変容し続ける熱帯傾斜地農業に関する調査を継続していくつもりにしています。

とは言っても、この夏は、中学受験を控えた我が子とにらめっこをしている毎日なんです。が。。。。。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第 4 期修了生)

(2009 年 8 月 13 日原稿受理)

知究人 10 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 31 号の第 10 回目は、京都大学大学院に進学された**早坂麗子**さんをお願いしました。

「近況報告」

早坂 麗子

国際学部の皆様、お久しぶりです。国際学部第 10 期生早坂麗子です。私は 2008 年に国際社会学科を卒業し、京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科 アフリカ地域研究専攻

に進学しました。現在一貫制博士課程 2 年目です。

宇都宮を離れ、京都に住まいを移してから 1 年以上が経ちました。皆京都という土地にはなにがしかの憧れがあるらしく、京都に越す際には友人達にいいな、いいなと口々に言われうらやましがられたものです。しかし、この 1 年というもの、実際には京都で過ごす時間はそれほど多くありませんでした。これが配信される頃も京都から遠く離れたところで研究しているはずで。配信時に私がいる場所は中央アフリカ・カメルーンです。この夏からそこで数ヶ月間調査生活に入ります。今年は五山の送り火が見られないのかと思うと残念でなりません。山に文字が浮かび上がる頃には、村で調査に奔走していると思います。

少し大げさに言えばこれがこの研究科に所属する学生の宿命のようなものです。私の所属するアジア・アフリカ地域研究研究科は地域研究を掲げ、フィールドワークに力を入れています。現在に至るまで多くの学生を海外に派遣し、その調査を支援してきました。私の今回の調査もそういった支援を受けたものです。

もちろん、海外に渡航することが義務ということはありませんが、研究科の中でもアフリカ地域研究専攻では大多数が海外に行き数ヶ月、時には 1 年以上フィールドワークを行います。この研究科のおもしろいところは、生態、地理、農業、土壌、経済、言語とあらゆる専門の研究者が「地域研究」の名の下に同じ研究科に所属するところです。ゼミでは思いもよらない視点から質問が飛んでくるのでひやひやしますが、いい刺激を受けています。ある現象を捉えるのには多角的な視点が有用ですが、この研究科にいと自然とそれが養われるのを感じます。特に地域で今起っている問題を考える場合にいろんな分野の意見を聞けるのが心強く思いますし、それがこの研究科の魅力だと感じています。

思い返すと学部時代は地域もディスプリンも違うことをつまみ食いの様に学び、一時はそれが悩みでもありました。しかし、そうした学部時代を経て現在があるのだと今は思っています。学部時代に自由にのびのびと好きなことを学べたことは今の研究生生活の肥やしとなっています。国際学部で培った物事を広く捉える視点を大切にしながら、現在地域研究に取り組んでいる最中です。

最後になりましたが、せっかくなので調査について少し触れようと思います。今回私は牧畜民の集落に長期で入り込む予定です。非常におおざっぱに言えば牧畜民の生計維持システムを解明することを目的としています。アフリカのどこかでお宅訪問をしてお茶菓子をいただいている、あるいは牛やヒツジ、ヤギの数を数えてメモを取っている、私は今頃カメルーンでそんなようなことをやっていると思います。

(2009 年 7 月 24 日原稿受理)

海外だより 04 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、エクアドルでご活躍の友松研究室 OB の**須郷隆雄**

さんのブログから転載させていただきました。なお、詳しくブログを読みたい方は、「選歴院生極楽トンボ」(<http://blogs.yahoo.co.jp/sugoutakao>) をご覧ください。

「エクアドル統一選挙」

須郷 隆雄

エクアドルの統一選挙が始まった。大統領、副大統領、国会議員に県会議員、県知事、市長の統一同時選挙だ。4月26日が投票日。党派毎に様々なデザインの旗を掲げ選挙戦の真最中だ。掲げられる旗の数で、優勢な候補者が次第に見えてくる。それにしても、これだけの統一、しかも同時選挙をして国政に支障をきたさないものかと気になる。

選挙権は18歳から65歳までが強制義務を有する。しかし、16、17歳の若者及び66歳以上の老人は自由意志で選挙することが出来るとなっている。同様に警察官や軍人、5年以上在住の外国人も自由意志だ。強制ではない。「ところ変われば品変わる」選挙も国によって大分違うようだ。

現大統領コレアグループが優勢に見える。エクアドルでは大統領の任期は1期4年と定められていた。しかし、昨年9月の憲法改正で再選が可能になった。チンボラソの現知事クリカマや前ペニペ市長でリオバンバ市長候補のサラサルもリードしている感じだ。共にインディヘナを選挙母体とするコレアグループだ。彼らの旗印は虹色だ。地方に行くほどこの虹色旗が圧倒的な数を占めている。選挙戦は加熱の一途だ。町を歩いていても、バスに乗っても、候補者のチラシを配りに来る。最近では車を連ね、支持旗を掲げ、ボリュームを最大限に上げ音楽を奏で、デモンストレーションしている。候補者の看板は所かまわず掲げられているが、政策を街頭演説している姿は見たことがない。

ラテンアメリカの政治文化といえればペルソナリスモ（身びいき主義、縁故主義）と言われる。これが政治腐敗と政権の不安定を招いている。そのため軍政と民政が代わる代わる交代し、政治が安定しない。ラテンアメリカの特徴として、軍の支配や影響力があるが、エクアドルの政治にもその特徴が現れている。しかしエクアドルの大衆の間には、政治経済エリートは利己的で腐敗しているとの不満が根強い。

世論調査によると、軍を信頼する人は63%にのぼる一方で、政府(14%)、裁判所(9%)、議会(7%)、政党(6%)に対する信頼は低い。エクアドルの軍は企業経営や社会・教育活動も手掛けている。これら一連の活動を通じて雇用を創出し、外貨を獲得し、産業の国際競争力を高め、民生を向上させることに使命感を抱いているようだ。貧困や低開発は共産主義や体制打倒の温床になりかねず、それを防ぐためには大衆の生活水準を向上させなければならない。国家の発展を主体的任務と位置づけ、政治に口を出し、時には政権に就き、開発政策を進めてきた。陸軍は鉄鋼や機械から銀行経営、ホテル経営、更に花卉栽培やエビ養殖などアグリビジネスまで手掛けている。海軍はタンカー会社を持ち、空軍は国内最大の航空会社を運営している。軍が高い信頼を得ている背景には、このような活動が評価されているからだろう。

1930年代以降ポピュリズムと呼ばれる新しい政治スタイルが現れた。その背景には、

シエラの伝統的な地主勢力が凋落し、コスタのブルジョア層による自由主義支配への反発が強まるなか、都市貧困層の増大があった。そこに現れたのがベラスコ・イバラだった。「我にバルコニーを与えよ、されば大統領たらん」雄弁家で、演説や選挙キャンペーンで演劇的なパフォーマンスを繰り返し、民衆や貧困層を魅了した。しかし度重なる亡命で「偉大なる不在者」と呼ばれるように、このポピュリズム型政治はしばしば保守勢力や軍と対立し政治は安定しなかった。バルコニーに立ち演説するベラスコ・イバラの像がキト市内にある。労働者を基盤にした改良的な民族主義的政治運動、人民主義を今もバルコニーから大衆に語りかけている。

エクアドルの政治の安定と真の民主主義を根付かせることが出来るか否かは、軍の態度の問題だけではなく、政治経済エリートの良質な行動と統治能力、政治システムの質的向上に掛かっているといえそうだ。

4月26日、いよいよ投票日を迎えた。町は静まり返っている。投票所が何処にあるのか解らない。人の流れにあわせ歩いていく。次第に人が増えてくる。投票所の周りは露店が立ち並び大混雑だ。投票会場はソレシオノ小中学校。地域毎に、しかも男女別に投票する。

「El Voto Es Secreto(投票は秘密)」と書かれている。市長候補のサラサールがやってきた。一斉に拍手が起こる。人だかりが出来た。カメラを向け、手を上げると、サラサール夫妻が笑顔で応じてくれた。会場を一周して帰っていった。

今の段階では誰が大統領になるのか、県知事になるのか、市長になるのかは解らない。そこで出口調査を試みた。答えは旗の数に比例していた。ここリオバンバでは虹色旗が圧勝のようだ。外は相変わらず露店が大賑わいだ。選挙とは無縁のように。帰りがけ、掃除婦エステラの家族にあった。生活が少しでも良くなるように貴重な1票を投じたのであろう。

翌朝新聞を購入すると、現大統領コレアが既に過半数を超える54%を確保し当選を確実にしたと報じられていた。対抗馬のルシオは31%、元大統領ノボアは8%だった。地元の現知事クリカマも市長候補サラサールも予想通り当確となっていた。

平成21年4月26日

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第3期生)

(2009年8月24日原稿転載)

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2009年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は、田巻研究室OBの**岩永健吾**さん(平成17年度修了)と伊藤研究室OGの**鄭楽静**さんにお願ひしました。

「近況報告」

岩永 健吾

みなさま、ご無沙汰しております。在学中は社会人学生として都内の会社で働きながら、週に1、2回、宇都宮へ通学する日々でした。修了後、しばらくは会社員として働いていま

したが、思うところあって転職しました。4月から小学校の教員として勤務しています。40歳を過ぎてからの異業種への転職はチャレンジといえますが、どうにか一学期も過ぎ、新しい生活にも慣れてきたところです。現在は在住している調布市内の公立小学校で3年生から6年生までの音楽の授業を担当しています。音楽専科なので担任は持ちませんが、多くの子どもを一度に見る難しさや、授業の進めかた、曲の研究などは試行錯誤の繰り返しです。大学時代に教育学部で音楽を専攻し、またサークルで混声合唱をしていたこともあり、音楽と関わるのは全く初めてではないのですが、うつろいやすい子どもの興味をいかに持続させるかということに心を砕いています。

先日、手品を見に行っただけですが、手品師が観客をどう巻き込んで集中させるかというところに、授業のヒントがありました。例えば、何も持っていない手から真っ赤なハンカチを取り出したあとに、もう一度手を閉じる。観客はまたハンカチが出てくるのかと思いきや、今度は鳩が飛びだしてくる。観客に予想や期待をさせておいて、それを思いがけない方法で上手に裏切る。授業は面白いだけでは困るのですが、特に音楽では子どもの心を上手に開放できる環境を用意することが大事だと実感しています。

話は変わりますが、大学院ではポピュラー音楽文化の研究をしていました。修了後も在野での研究を続けていきたいと思っています。現在のテーマはサルサと呼ばれる音楽で踊られるダンスの日本での普及とその変容についてです。日本では1990年代前半にサルサを踊る場ができ、サルサを教える人も出てきました。当時、サルサを踊る人々は、キューバをはじめとするラテンアメリカの文化に関心のある人々がほとんどでした。ところが、1998年頃から、それまでロコミなどに限られていたサルサの情報が、情報誌などの普及や仕掛け人のプロモーションなどにより、次第に流通するようになりました。新たにサルサのダンスを始めた人々は、文化より踊りの動作などのビジュアル面に興味を持っていました。サルサのダンスを競い合う場が生まれ、ダンスを教える人々も増え、サルサを踊る人の数は増加していきました。このように、ある文化要素が文化の発祥とされる土地から地理的に遠く離れた場所でどのように普及していくのか。その過程を社会学、特にブルデューに依拠して論じていきたいと考えています。今後の活動など詳しくは<http://www.salsamania.jp>をご覧ください。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第5期修了生)

(2009年8月24日原稿受理)

「まぐれ当たりの研究への道」

鄭 楽 静

国際学研究科及び国際学部の皆様、こんにちは。

国際学研究科国際社会研究専攻の鄭楽静と申します。私は2004年4月日本に来てからずっと宇都宮大学で充実した日々を送っていました。去年の春に国際学研究科を修了し、京都大学人間環境学研究科の博士後期課程に進み、今は毎日を研究室で過ごす生活を送って

います。年に一、二回の海外フィールドワークは私にとって息抜き場となっています。

私は大学三年の前期に、一年間の宇都宮大学国際学部への交換留学という貴重なチャンスをいただきました。初めての留学生活を楽しみながら、ある種の不安に包まれました。来日する前に通っていた寧波大学日本語学科は、一、二年目が日本語の学習で、三年目から専門課程というカリキュラムです。中国にいる時、「専攻は何ですか」と聞かれると、すぐに「日本語です」と答えていた私は、来日当初、同じ質問への答えを迷っていました。なぜなら、ここにいるみんなは日本語をしゃべれるからです。

これからどの道を歩いていこうかとずっと悩んでいた私が「日中友好雄鷹会」に出会いました。ボランティアとして、中国から帰ってきた日本人残留孤児たちに日本語を教えたり、生活面での手伝いをしたりするうちに、初めて彼らの困難に満ちる生活史を知りました。残留孤児たちが中国で日本人扱いされ、日本に戻って今度逆に中国人扱いされて、生活保護を受けながら最低限の生活を送っていることにショックを受けた私は、彼らがどんな思いで日本に来たのか、今抱えている問題をどう解決できるのか、このような問題を発生させた社会の仕組みがどうなっているのかを研究してみようと思うようになりました。

ちょうど当時所属している国際学部では「近現代中国論」など専門的な科目があり、研究の入り口で彷徨っている私にとって、ありがたい明るい道しるべでした。

「残留孤児」問題を研究している内に、たくさんの日本人ボランティア団体に出会い、彼らは生活面の援助の他に、訴訟にも取り組んでいるのを知り、そこで、私はまた驚きました。これらの団体は「残留孤児」問題を含む日中戦後補償訴訟（例えば、強制連行・強制労働問題、731部隊細菌戦問題、慰安婦問題）を支援していました。日本人はなぜ他国の人のために、自分の母国を被告席に立たせるのか？彼らはどんな動機でこの運動に参加したのか？これらの運動が日本人の戦争認識にどんな影響を与えたのかと、私はますます興味湧いてきて、修士課程に入って更なる研究を進めようと思えました。

こうして、私は国際学部や国際学研究科という研究環境に恵まれて、ボランティア活動から研究への道を歩むことになりました。この経験談が、今研究テーマ探しを悩んでいる方の力になれば、嬉しいです。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第8期修了生)

(2009年8月21日原稿受理)

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 chikyukai@yahoogroups.jp